

前号を読んで

学生とともに歩む

辻村真貴

生命環境科学研究科講師

「先生は何も教えてくれない。」

その日、ゼミ発表が終わった後で私の研究室にやって来た指導学生のA君は、声を震わせながら私に向かって抗議した。

私は、大学院の教育とは、私自身の研究者としての姿勢を、身をもって学生に示すことだと思っている。野外調査や観測では、必ず最初は学生とともに現場で一緒に作業をしながら指導している。得られたデータをいろいろと解析し、自然の中で生じている現象を解明していくプロセスは、研究の最も重要なところである。ここでは、「自分で考えろ。」と、少し学生を突き放す。突き放しつつ、一緒に考える。どの程度突き放すかは、学生の能力や研究テーマによって異なってくるが、この呼吸は難しい。

A君は、とても優秀な学生であり、私も期待していたので、無意識のうちにかなり厳しく接していたのだと思う。彼が何かをやり遂げても私は決して誉めることはせず、より高

度な次の段階を要求した。それが彼には重荷だったのか、修論提出まで1ヶ月を切ったある日、ついにA君は私に対して、胸にたまっていた思いをぶちまけたのだ。私は彼の言い分に耳を傾け、そして私がどのように考えて彼を指導してきたかを、ありのままに語った。話し終わったとき、お互いに少し理解が深まったように感じた。その後A君は優れた修論を仕上げ、そして私が惜しむのを背にしつつ、第一希望の会社に就職していった。

A君を指導したことは、私にとって非常に貴重な経験であった。私は「学生は一人一人異なる個性をもっており、教員の接し方も少しずつ異なって良い。」という、至極あたりまで重要な教訓を得た。とは言え、「今日のゼミでのコメントは、言い方が良くなかったのではないか?」、「もっと厳しく注意すべきだったのでは?」等々、日々悩むことが多い。

「私は学生時代に先生に厳しく指導されたことを、ありがたく思っています。」

最近A君からもらった言葉は、私に勇気を与えてくれるものであった。大学院の教育システムについてもいろいろ考えるところはあるが、学生とともに真摯に研究するという姿勢だけは、研究者であるとともに教育者である私が、常に忘れてはならないことであると思う。

(つじむら まき/水文学)